

鹿児島県南九州市知覧町南別府にある松崎明治の生家。実家は海運業を営んでおり、現在も敷地内には立派な蔵を構えている。



昭和の釣りと文学文化遺産 松崎文庫

文化遺産として日本の釣りを記録したパーソナル・ライブラリー

鹿児島県知覧町に生まれた松崎明治。
『釣技百科』『写真解説「日本の釣」』など、
昭和の釣りを当時のハイテクともいえる
写真技術と図版で体系的に記録し、
その複雑な釣りの技術を解りやすく、
一般に伝えた功労者だ。
その松崎明治氏の所蔵した当時の釣り関連書籍、
魚類関連書籍からなる「松崎文庫」が
鹿児島大学附属図書館水産学部分館で一般展示された。
そこで松崎明治研究の第一人者である、
鹿児島大学附属図書館水産学部分館長の不破茂氏に
松崎明治の人物像を解説してもらった。



『釣魚大全』第1～12巻 上田 尚

語り◎不破 茂 Talk by Shigeru Fuwa
写真◎狩野イサム Photographs by Isamu Kano

松崎明治

(まつざき めいじ)

1898(明治31)年～1950(昭和25)年。鹿児島県知覧町生まれ。早稲田大学哲学科卒。朝日新聞記者として釣魚欄を担当。学究的態度で釣技研究に取り組み、溪流から沖釣りまで広範な分野の釣りについて詳細な著述を残した。昭和13年に朝日新聞社から発行された代表作『釣百科』は、戦前に12版まで増刷され、戦後には佐藤垢石による増補版が大泉書店から刊行。また、『写真解説 日本の釣』は日本初の釣り写真集として評価が高い。



鹿児島大学附属図書館水産学部分館には、「松崎文庫」という釣りに関する書籍群があります。これは長い期間、眠っていた貴重な資料です。私は今から20年ほど前に、こうした書籍群があるということを知り、図書館職員の尽力で徐々に整理を進め平成16年頃から一般公開を行い、平成26年7月の図書館リニューアルに合わせて、蔵書の個室での一般展示が実現しました。この松崎文庫には現在、蔵書が約300冊、雑誌が約300冊、計600冊ほど展示されています。松崎明治の著書で代表的なものに『写真解説 日本の釣(昭和14年刊)』『釣技百科』(昭和17年刊)がありますが、これらは釣りの古典と呼ばれています。『日本版釣魚大全』と云ってもよいものです。また、釣り雑誌に寄稿されたものを読むと、飛びぬけて多いのが釣魚に関するものです。気軽な読み物風の記事やエッセーもありますが、基本的には非常に学者肌というのでしょうか、釣りというものを科学的に捉えているのが特徴です。本学部への寄贈は、昭和24年と27年の2回にわたって行われました。松崎明治は昭和25年にお亡くなりになっていて、寄贈は生前に一度、そしておそらく三周忌の遺品の整理の後に、2回目の寄贈がなされたのだらうと思います。

鹿児島大学水産学部において、この松崎文庫は釣りと漁業技術に関する貴重な資料群で、江戸時代から昭和10年代までの漁業資料が網羅されています。

現在、魚を獲る技術研究は、延縄や巻き網、トロール網といった大規模漁業にはばかり集中しており、一本釣り漁業は見過ごされがちな傾向がありました。しかし、水産資源の持続的活用が水産業に課せられた使命であり、資源を再生する漁業技術として、釣りはもともと基本的な技術であると思います。それを考える上で、松崎文庫は非常に良い資料となりました。

松崎明治は、早稲田大学哲学科出身です。商学部を卒業後哲学科に入学し、大学を2回卒業されています。そして新聞記者をしながら「釣り博士」になりました。非常に客観的なものの見方をされる方で、その著書『釣技百科』は、まさにエンサイクロペディアの産物でもあります。釣りだけでなく、対象魚の生物学的な特性、漁場まで含めて書かれています。目を引くのは、江戸時代から昭和16年までの関連文献一覧の量です。また、魚の呼び方は、地方名ではなく標準和名として記述され、その魚がどういう習性か、口の構造、漁場の水深と水温、潮流、仕掛けの作り方、餌の選び方、合わせ方まで、詳細に記述しています。



『釣技百科』（朝日新聞社 1942 年刊）は、1938年に朝日新聞社から発行された『釣百科』をベースに松崎明治自身が増補した最後の著作である。

この本は、その後数多く発刊される釣り入門書に、大きな影響を与えました。

松崎明治と並んで有名な釣り研究家に佐藤垢石がいます。両者とも新聞記者です。朝日と報知新聞で、それぞれ釣り欄を担当していました。佐藤垢石は戦後有名になつていく方ですが、釣りの捉え方は松崎明治と180度違います。松崎明治は、釣りは「漁」のひとつであると捉えていましたが、佐藤垢石は「いかに楽しむか」ということを念頭に執筆活動をしています。

その客観性が『写真解説 日本の釣』という、日本で最初の釣りの写真集にも随所に表れています。これは当時の釣りの空気そのものを写し込んでいると同時に、釣り方や仕掛け、道具の仕立てから餌の付け方まで、細かく写真で記録されています。対象となるのは、遊び釣り、職業釣り、さらに少年のフナ釣りから旦那業の粋な遊びであったタナゴ釣りまで、掲載された写真166枚は非常に多岐にわたります。

釣りの技術は、それぞれの土地や対象魚によって異なり、地方ごとに独自性があります。それを写真で記録することで、各々の特徴がよく伝わるだろうと日本中を歩き、約7千枚もの写真を撮ったそうです。昭和10年代に7千枚の写真の撮るといふことは、大変なことだと想像します。カメラ自体が庶民には手を出せない超高級品であり、さらに膨大な量のフィルムを確保するのは、並大抵のことではないはず。知り合いの写真家に聞くと、当時はロバート・キャパが愛用したライカが世に出たばかりのころで、日本人で買えた人はごく限られた層だったはずだと。

撮影は、水が深から低きに流れるが如く、溪流釣りに始まり、湖の釣り、中流域の釣り、低地の釣りというふうに分類されています。海の釣りは、岸から歩いて渡れるところから、鯛釣りをはじめとする船釣り、その他の沖釣りに分かれています。取材場所は勤務地の関係上、東京中心に



上は『釣技百科』（朝日新聞社 1938 年刊）。戦前までにかなりの版を重ね、戦後に佐藤垢石による増補版が大泉書店から発売された。下の『新釣百科』（大泉書店 1962 年）は尺貫をメートルに改めた改訂版。



『写真解説 日本の釣』。三省堂が 1939 年に発刊したものを、アテネ書房が 1979 年に復刻。復刻版は古書店を探せば状態の良いものが手に入りやすい。

ならざるを得ません。しかし、青森県の奥入瀬や十和田湖、神山地周辺の釣りも取材していますし、飛騨の山々や白川郷、四国も訪れています。九州では球磨川、鹿児島湾、枕崎など、やはり地元の鹿児島は大事にされたようです。こうして撮影した7千枚の写真の中から、166枚を厳選して掲載したわけですが、私なりの解釈ですが、松崎明治は釣りに深い愛情を持っておられたと思います。その愛情が全国各地の釣りに深い愛情を研究の対象として、その多様性を記録したのだと思います。私はそれを『釣魚学』と名づけたのですが、そういう学問体系を作り上げた人物です。当時、『釣技百科』を論文として東大の大学院に提出すれば、農学博士の学位をもらえたと思います。まさに『日本の『釣魚大全』です。アイザック・ウォルトンの『釣魚大全』を、はるかに凌ぐ内容だと思っています。



不破 茂
(ふわしげる)

1949年福岡県生まれ。鹿児島大学教授・水産学博士。専門分野は漁具設計学、漁具の基本設計と漁具の運動や漁獲機構の研究。現在、目的とする種やサイズだけを選択的に漁獲する漁具の開発など研究成果多数。餌木の研究とともに見えてきた松崎明治の功績を鹿児島大学附属図書館水産学部分館内に「松崎文庫」として一般展示。